様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６２９
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１８５８７

研究課題名（和文）混合研究法による社会学方法論の新スタンダードの構築：データと理論の統合への挑戦

研究課題名（英文）Constructing a new standard of sociological methodology by mixed methods: A challenge to combine data and theory

研究代表者
小林　盾（KOBAYASHI, Jun）

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：９０４０７６０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、ライフコースの多様化を事例とし、これまでの量的データと質的データの統合だけでなく、理論も含めた統合に挑戦した。その結果、教育、職業、収入、恋愛、結婚、出産、美容、食生活、ウェルビーイングといったさまざまな局面で、ライフコースの多様化が進むとどうじに格差が拡大していることが、量的データによって示唆された。こうした傾向が、さらに質的データによって当事者たちの主観的な意味づけとともに裏付けられた。合理的選択理論にもとづいてこの傾向を人的資本、社会関係資本、文化資本などへの投資と回収としてとらえると、統一的に理解できることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、量的データと質的データだけでなく、理論を含めた統合をおこなうことで、混合研究法の新しい地平を例示できた。その結果、社会学方法論の新スタンダードとはこのようなものだろうというイメージを、提供することとなった。今後への課題としては、ライフコースの多様化だけでなく、グローバリゼーション、社会のデジタル化など他の事例にも応用することで、より切れ味の鋭い、しかしだれにでも利用可能な方法論へと成長させることが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to tackle the integration of both quantitative and qualitative data, as well as theories, using the diversification of life courses as a case. As a result, the quantitative data suggested that as the diversification of life courses progresses in various aspects such as education, occupation, income, romantic relationships, marriage, childbirth, beauty, food, and well-being, inequality is accordingly widening. These trends were further supported by qualitative data, which provided subjective meanings from the perspectives of the individuals involved. A unified understanding was demonstrated by understanding these trends as investments and returns in human capital, social capital, cultural capital, and other factors based on rational choice theory.

研究分野：社会学

キーワード：混合研究法　社会学方法論　データ　理論　ライフコース

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

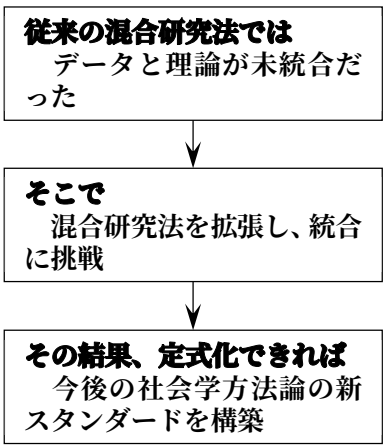
（1）　21 世紀に入り、グローバリゼーションの進行、社会的格差の拡大、移民の増加など、世界的にますます社会が多様化し複雑化している。こうした状況を包括的に理解し真の豊かさを構想するためには、単一の視点では不十分で、複眼的にアプローチすることが不可欠だろう。

（2）　そのために、混合研究法という方法論が役立つ。混合研究法とは、「ある研究対象について複数の方法で（とくに量的方法と質的方法によって）アプローチすること」を指す。アンケート調査などから得た量的データは調査対象の全体像を統計的に把握しやすく、インタビュー調査やフィールド調査などから得る質的データは「なぜなのか」という因果メカニズムの理解に優れる。両方を収集・分析・解釈し混合すれば、単独の場合より課題を重層的立体的に解明することが期待できる。

（3）　ただし、これまで混合研究法は「量的データと質的データの統合」に限定され、「理論とどう統合するのか」が課題となっていた。これが未解明のままだと、ともすれば理論構築と実証分析が乖離し、いわば「理論なき実証」と「実証なき理論」が別々に展開しかねない。

２．研究の目的

（1）　そこで本研究の目的として、混合研究法のフレームを拡張し、これまでの量的データと質的データの統合だけでなく、理論も含めた統合に挑戦した。もし成功すれば画期的なブレークスルーとなり、今後の社会学方法論の新しいスタンダードを構築できるだろう（下図）。



（2）　そのために、ライフコースの多様化を事例とし、合理的選択理論で量的分析と質的分析をブリッジングすることを試みた。その際、ライフコースの多様化にともなって、さまざまな局面で不平等が拡大したのではないかという仮説をたてて、研究を進めた。

３．研究の方法

（1）　第１段階として、データ収集を行なった。量的データとして全国の個人を対象としたランダムサンプリングに基づく面接調査を実施した。質的データとして、量的データの回答者を含む人びとを対象に、半構造化インタビュー調査を実施した。

（2）　第 2 段階として、量的データと質的データの統合を行なった。統計分析によって全体のパターンをつかんだうえで、質的分析によってパターンごとの、ただしパターンに収まらない個人的な意味づけを読みとり、１人１人のストーリーをたてた。

（3）　最終的に第 3 段階として、理論を含めて検討した。合理的選択理論は、人びとの合理性というシンプルな仮定をおくことで、特定の状況にしばられない柔軟な仮説設定が可能となる。そこで、第 2 段階でえられた知見を合理的選択理論によって理論的に再構築することで、より一般的な知見へと抽象化することをめざす。

第 1 段階
　量的データと質的データを収集

↓

第 2 段階
　量的データと質的データを統合

↓

第 3 段階
　理論を含めて統合

４．研究成果

（1）　2017 年度と 2018 年度は、第 1 段階としてデータ収集を行なった。第 2 回社会階層とライフコース全国調査によって量的データを、全国でのインタビュー調査によって質的データを収集した。

（2）　2019 年度から 2021 年度に、第 2 段階として量的データと質的データの統合を行った。その結果、教育、職業、収入、恋愛、結婚、出産、美容、食生活、ウェルビーイングといったさまざまな局面で、ライフコースの多様化が進むとどうじに格差が拡大していることが、量的データによって示唆された。こうした傾向が、さらに質的データによって当事者たちの主観的な意味づけとして裏付けられた。これらの成果は、書籍『変貌する恋愛と結婚：データで読む平成』（小林盾他編、新曜社、2019 年度）、書籍『美容資本：なぜ人は見た目に投資するのか』（小林盾、勁草書房、2020 年度）、書籍『嗜好品の社会学：統計とインタビューからのアプローチ』（小林盾編、東京大学出版会、2020 年度）、論文「子どもの貧困とウェルビーイング：初の全国調査による実態解明」（小林盾、『成蹊大学文学部紀要』、2021 年度）として発信された。

（3）　2022 年度には、第 3 段階として合理的選択理論を用いて、データと理論の統合を行った。その結果、合理的選択理論にもとづいて上記の傾向を人的資本、社会関係資本、文化資本などへの投資と回収としてとらえると、統一的に理解できることが示された。こうした成果は、書籍『リーディングス合理的選択論』（小林盾他編、勁草書房、2022 年度）の序文、書籍『数理社会学事典』（小林盾他編集幹事、丸善出版、2022 年度）の「合理的選択理論とは何か」「昇進とソーシャル・キャピタル」「性別役割分業」といった項目として発信された。

（4）　こうして、量的データと質的データだけでなく、理論を含めた統合をおこなうことで、混合研究法の新しい地平を例示できた。その結果、社会学方法論の新スタンダードとはこのようなものだろうというイメージを、提供することとなった。

第 1 段階（2017 年度，2018 年度）
　第 2 回社会階層とライフコース全国調査によって量的データを、全国でのインタビュー調査によって質的データを収集

↓

第 2 段階（2019 年度～2021 年度）
　量的データによってライフコースの多様化と格差拡大が示唆され、その傾向が質的データによって当事者たちの主観的な意味づけとして裏付け

↓

第 3 段階（2022 年度）
　合理的選択理論にもとづいて人的資本、社会関係資本、文化資本などへの投資と回収としてとらえ、統一的に理解

↓

その結果
　混合研究法の新しい地平を例示し、社会学方法論の新スタンダードのイメージを提供

（5）　今後への課題としては、ライフコースの多様化だけでなく、グローバリゼーション、社

会のデジタル化、移民など他の事例にも応用することをとおして、より切れ味の鋭い、しかしだれにでも利用可能な方法論へと成長させることが期待される。そうすることで、おおくの人の心に寄り添った、ほんとうに豊かな社会とはどのようなものかを導くための強靱な手法となることだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 小林盾	４．巻 57
２．論文標題 子どもの貧困とウェルビーイング：初の全国調査による実態解明	５．発行年 2022年
３．雑誌名 成蹊大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小林盾，カローラ・ホメリヒ	４．巻 4
２．論文標題 どのような言葉が人を幸せにするのか：自由回答のテキスト・マイニング分析を用いた混合研究法アプローチ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ソーシャル・ウェルビーイング研究論集	６．最初と最後の頁 31-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 小林盾
２．発表標題 子どもの貧困とウェルビーイング：初の全国調査による実態解明
３．学会等名 数理社会学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計6件

１．著者名 小林　盾、金井　雅之、佐藤　嘉倫	４．発行年 2022年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 272
３．書名 リーディングス　合理的選択論	

１．著者名 数理社会学会 数理社会学事典刊行委員会	４．発行年 2022年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 782
３．書名 数理社会学事典	

１．著者名 小林　盾	４．発行年 2020年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 242
３．書名 嗜好品の社会学：統計とインタビューからのアプローチ	

１．著者名 小林　盾	４．発行年 2020年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 240
３．書名 美容資本：なぜ人は見た目に投資するのか	

１．著者名 小林　盾	４．発行年 2020年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 240
３．書名 美容資本	

１．著者名 小林盾，川端健嗣編	４．発行年 2019年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 278
３．書名 変貌する恋愛と結婚：データで読む平成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ライフコース格差研究プロジェクト
https://www.cc.seikei.ac.jp/kazoku/index.html
小林盾研究紹介　社会的不平等への統計とフィールドワークアプローチ
https://www.seikei.ac.jp/university/research/introduction/2021/11551.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山田　昌弘 (YAMADA Masahiro) (90191337)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	ホメリヒ　カローラ (HOMMERICH Carola) (60770302)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	内藤　準 (NAITO Jun) (00571241)	成蹊大学・文学部・准教授 (32629)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関